

日常生活場面における認知的失敗行動の自己評価と時間的展望 —認知的失敗質問紙(CFQ)とジンバルド—時間的展望尺度(ZTPI)の関係—¹

清水 寛之 神戸学院大学心理学部

**Self-assessment of cognitive failure and time perspective in everyday life:
An analysis of data collected by the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ)
and the Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI)**

Hiroyuki Shimizu (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

The purpose of the present study was to elucidate the relationship between metamemory and time perspective in everyday life using the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and the Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI). A hundred and twenty-two undergraduate and graduate students (18-26 years old) participated in the study, and the two kinds of questionnaires were successively administered to each of the participants. The participants were asked to rate 25 items of the CFQ (5 factors) on 5-points scales, and 56 items of the ZTPI (5 factors) on 5-points scales. The results indicate statistically significant positive or negative correlation of ratings between several factors, but there were no relation between the other factors. The results were discussed in terms of the meaningful interpretations for the positive or negative relation among the factors and the possibility of practical implications of the data of high or low correlations between the specific factors in cognitive failure and time perspectives.

Key words : metamemory, cognitive failure, time perspective, the Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) , the Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI)

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2018, Vol.1, No.1, pp.33-41

私たちは、日常生活のさまざまな場面において自らの行動の結果が当初の意図や目的とは異なる点に気づくことがある。つまり、なんらかの意図や目的をもって開始した行動や言動が必ずしも思い通りの結果をもたらすとは限らないことを経験する。当初の目論見がはずれ、望ましい結果が得られなかったり、望ましくない結果に終わったりする。あるいは、はじめから明確な意図や目的がなく、深く考えずに起こした行動や言動が思いのほか深刻な状況につな

がることもある。ふとしたはずみで取った行動があとになって誤っていることに気づいたり、習慣化された行動が不適切な状況の下で現れてしまったりすることもある。このように、人は誰しも程度の差こそあれ、失敗やしくじりといったものを自覚しながら日々の生活を営んでいると言える。

人間の失敗や過誤に関する心理学的研究は、主に、ヒューマンエラー (human error) に関連して行われてきた。ここでのヒューマンエラーとは、通常は、計画された精神活動や身体活動のうち、意図した結果に至らなかった活動で、他の偶発的事象の介入が原因となって生じた失敗や過誤は除外される (Reason, 1990)。その場合、実際にどういった状況の下で人は何に対してどのように失敗しやすいかと

¹ 本研究は、JSPS 科研費 22530803, 25380992, 17K04510 の助成を受けたものである。本研究の一部は、日本心理学会第 82 回大会 (2018 年 9 月 25 日) において発表された。

いうことに焦点が当てられる（芳賀，2004；井上，2002；海保，1999；Reason, 1984, 1990）。しかしながら，その一方で，客観的な失敗の事実とは別に，人が自らの失敗の傾向をどのように受けとめ，それらを自身の個人特性として認めるかによって，さまざまな思考様式や認識，見解に影響が現れることは大いに考えられる。では，日常生活場面での失敗行動に関する自己評価と，自らの過去や現在，未来を認識する際の特徴との間には，どのような関係があるのだろうか。たとえば，失敗行動を数多く経験することによって，認知や記憶に関する自己効力感が弱まり，一生涯にわたる自己に対する肯定的捉え方の低減や否定的な捉え方の高進につながる可能性のあることは容易に推察できる。あるいは，自己の認知能力や記憶能力に対する評価が通常よりも低かったり，認識が乏しかったりすると，将来の目標を設定しにくくなることが考えられる。その逆に，自己の将来像に対して明らかに悲観的な，あるいは宿命的な見方をする個人ほど，自己の記憶機能に関する信念が偏っていたり，記憶行動の失敗を過度に深刻に受けとめていたりするのかもしれない。したがって，日常生活場面での失敗行動に関する自己評価と自らの過去や現在，未来に関する認識との関係を明らかにすることは重要であると言える。

これまでに，メタ記憶（metamemory）の観点から，自己の記憶行動や記憶能力に関する認知と心理的な過去や未来に関する認知との関係を調べた研究は，ほとんど報告されていない。メタ記憶とは，個人や他者の記憶にかかわる個人の認識や知識，理解などを含む広い概念である（Nelson & Narens, 1990；清水，2013）。メタ記憶には，特定の記憶課題において記憶方略を使用できることに気づくことや，記憶課題の学習困難度，記憶する個人の状態や能力，使用できる記憶方略の有効性などに関連した事柄についての幅広い知識が含まれている。そうした知識だけでなく，自己の記憶行動を監視したり記憶成績を予測したりする能力や，自己の記憶行動のプランニングやコントロール，調整，修正などにかかわる諸能力もメタ記憶のなかに含めて考えることができる。

メタ記憶は，実験室場面において記銘や保持，想起，忘却に関連するさまざまな判断や予測を調べる方法が数多く考案されてきた（e.g., 清水，2012）。その一方で，現実の日常生活場面でのメタ記憶の問題を探るための方法もこれまでに研究されてきた。個人における日常生活場面での自己の記憶能力や記憶行動に関する認識は，メタ記憶質問紙（metamemory questionnaire）によって検討することができる。メタ記憶質問紙は，調査参加者個人の記憶能力や記憶行動に関する主観的判断や回想的評価を調べるものである。楠見・高橋（1992）は，メタ記憶質問紙をさらに，(a) 記憶能力の自己評価に関するもの，(b) 記憶方略の利用に関するもの，(c) 記憶の障害の受け

やすさに関するもの，の三つに大別している。このうち，(a) と (b) に関連して，メタ記憶質問紙のなかでも，とくに日常生活場面での認知的失敗傾向を測定する質問紙として，認知的失敗質問紙（Cognitive Failures Questionnaire：以下，CFQ と略す）がよく知られている。

CFQ は，Broadbent, Cooper, FitzGerald, & Parkes（1982）によって，日常場面での一般的な行動遂行にかかわる認知的失敗を調べるために開発された。認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部（全 25 項目，たとえば，「本などをよく考えないで読み過ぎてしまったために，もう一度読み直さなければならぬことが」）に対して，その相対的出現頻度を過去 6 か月の間で「全くない」から「非常によくある」までの 5 段階で評定することが求められる。Broadbent et al.（1982）は，CFQ によって捉える日常場面での認知的失敗行動は下位カテゴリーを設けるのではなく，全 25 項目の得点合計が全体的な失敗のしやすさを表すとしている。山田（1999）は，この CFQ に，より広範な失敗行動に関する項目を加えて調査を行ったところ，もとの CFQ の項目はほぼすべて一つの因子に関連していることを見いだした。その後，清水・高橋・齊藤（2006, 2007）の因子分析の結果では，CFQ が (a) 「空間的失敗」（場所や位置，方向性に関する認知的失敗行動に関連する），(b) 「うっかり，ぼんやりの失敗」（注意が散漫になっていたり，当該の記憶課題から気がそれてしまうといった状態と関連する），(c) 「検索失敗」（想起時の情報検索失敗に関連する），(d) 「約束の失敗」（相手との約束や自らが決めた事柄の失念と関連する），(e) 「人名記憶の失敗」（人名の記銘や想起に関する失敗に関連する），の五つの下位項目群からなることが示された（ただし，Wallace, Kass, & Stanny（2002）は「記憶」，「注意散漫」，「不手際」，「名前」という 4 因子を抽出している）。

他方，個人の心理的な過去や現在，未来に関する認知は，時間的展望と深く関係している。時間的展望とは，「ある一定の時点における個人の心理的過去と未来についての見解の総体」（Lewin, 1951/1979）のことである。白井（1997）は，万が一に備えて人が生命保険に加入するのは時間的展望の表れであるとする Lewin（1948）の見解を紹介している。したがって，たとえば，セルフハンディキャッピング（self-handicapping）や自己充足的予言（self-fulfilling prophecy）などもそうした文脈で捉えることができる。セルフハンディキャッピングとは，自分の何らかの特性が評価の対象となる可能性があり，かつそこで高い評価を受けられるかどうか確信がもてない場合に，遂行を妨害するハンディキャップがあることを他者に主張したり，自らハンディキャップを作り出す行為をいう（安藤，1990；Jones & Berglas, 1978）。また，自己充足的予言とは，このようにな

るのではないかといった予期が、暗黙のうちに特定の行動に人を向かわせ、結果として予言された状況を現実化してしまうプロセスを指す (Merton, 1957)。これらはいずれも、個人がこれまでの過去経験や現時点での状況の認知に基づいて将来の場面状況での自らの行動の結果を予測する際の一種のバイアスとみることができる。

時間的展望については、有用な測定尺度の一つとして、Zimbardo & Boyd (1999) によって開発されたジンバルドー時間的展望尺度 (Zimbardo Time Perspective Inventory, ZTPI) を挙げることができる。この質問紙もまた、数多くの研究で広範囲に使用されている (Boniwell, Osin, Linley, & Ivanchenko, 2010; Boniwell & Zimbardo, 2004; Drake, Duncan, Sutherland, Abernethy, & Henry, 2008)。下島・佐藤・越智 (2012) によって 56 項目から構成された日本版 ZTPI が開発されており、次の五つの因子が抽出されている。すなわち、(a)「過去否定 (Past Negative)」(自己の一貫性における否定的な側面と関連する)、(b)「未来 (Future)」(将来の目標や見返りのために努力する態度と関連する)、(c)「過去肯定 (Past Positive)」(自己の一貫性における肯定的な側面と関連する)、(d)「現在快楽 (Present Hedonistic)」(快楽的で危険を好み、向こう見ずな態度に関連する)、(e)「現在運命 (Present Fatalistic)」(人生は運命で決まっているなどの無力感を伴った態度に関連する)、である。

本研究は、メタ記憶と時間的展望との関係を探る総合的研究の一環として、メタ記憶質問紙の一種である CFQ と、時間的展望を測定する尺度である ZTPI とを同一の大学生に与えて回答を求め、その回答データをもとにそれぞれの質問紙を構成する因子間の相関関係を明らかにすることで、日常生活場面における認知的失敗傾向と時間的展望との関係を検討する。

方 法

調査参加者

近畿地方にある 4 年制大学に在籍する学部学生と大学院学生、合わせて 122 名が本調査に参加した。そのうち、男性が 58 名、女性が 64 名であった。調査参加者全体の年齢は、平均 20.3 歳、標準偏差 1.22、範囲 18 - 26 歳、であった。

調査期間

調査は、2012 年 3 月から同年 8 月にかけて行われた。

調査場所

調査は、認知心理学実験室 (神戸学院大学有瀬キャンパス 14 号館 5 階) で行われた。

質問紙の構成

認知的失敗質問紙 日常生活場面における記憶行動や記憶能力などに関する個人の自己評価を調べるためのメタ記憶質問紙として CFQ が用いられた。日常場面での認知的失敗に関連した出来事を表す記述文の一部 (全 25 項目、たとえば、「本などをよく考えないで読み過ごしてしまったために、もう一度読み直さなければならないことが」) に対して、その出現頻度を過去 6 か月の間で「まったくない」、「めったにない」、「ときどきある」、「かなりよくある」、「非常によくある」の 5 段階で評定することが求められた。

清水他 (2006, 2007) は、山田 (1999) の研究結果を参考に、CFQ が次の 5 因子から構成されるという結果を示している。すなわち、第 1 因子「空間的失敗」(項目番号 4, 12, 3, 18, 5: 因子負荷量 0.35 以上の項目だけを因子負荷量の高いものから順に示す。以下同様)、第 2 因子「うっかり、ぼんやりの失敗」(項目番号 8, 21, 15, 19, 9, 14, 1, 10)、第 3 因子「検索失敗」(項目番号 22, 25)、第 4 因子「約束の失敗」(項目番号 16, 17, 11)、第 5 因子「人名記憶の失敗」(項目番号 7, 20)、である。

ジンバルドー時間的展望尺度 日常生活場面における時間的展望を測定するための質問紙として ZTPI が用いられた。ZTPI は、個人の時間的展望に関する記述文 (全 56 項目) に対して「よくあてはまる」、「あてはまる」、「どちらともいえない」、「あてはまらない」、「全くあてはまらない」の 5 段階で評定することが求められた。

下島他 (2012) は、Zimbardo & Boyd (1999) の研究結果を参考に、ZTPI が次の 5 因子から構成されるという結果を示している。すなわち、第 1 因子「過去否定」(項目番号 50, 16, 34, 4, 27, 36, 54, 5 の 8 項目: 因子負荷量の絶対値 0.30 以上の項目だけを因子負荷量の高いものから順に示す。以下同様)、第 2 因子「未来」(項目番号 40, 45, 24, 10, 13, 21, 51, 6, 18, 43, 52, 30 の 12 項目)、第 3 因子「過去肯定」(項目番号 7, 11, 25, 20, 29, 49, 22, 41, 2 の 9 項目)、第 4 因子「現在快楽」(項目番号 42, 26, 31, 28, 44, 8, 32, 55 の 8 項目)、第 5 因子「現在運命」(項目番号 38, 14, 3, 39, 37, 53 の 6 項目)、である。

調査手続き

質問紙調査は、総合的なメタ記憶に関する研究の一環として、他の実験や検査、別の調査とともに、同一の調査参加者に対して個別に行われた。どの調査参加者に対しても、最初に CFQ が与えられたあとおよそ 10 ~ 15 分程度の休憩時間を置いてから ZTPI が与えられた。調査参加者がすべての調査に対して落ち着いて取り組めるように配慮がなされた。

調査参加者は、最初に全体的説明を受け、本研究への参加に関する同意書への署名が求められた。次に、調査が行われ、そのあとに参加協力への謝金の支払いに関する事務手続きが行われた。

分析方法

本研究における調査に関するすべてのデータは、表計算ソフトウェア Microsoft Office Excel 2013 によって集計・整理され、統計的分析は統計解析ソフトウェア IBM SPSS Statistics 25 によって行われた。質問紙調査によって得られた回答に対して以下の得点化が行われた。CFQ については、過去 6 か月の間で「まったくない」から「非常によくある」の 5 段階の出現頻度評定に対して、順に 0～4 の点数が与えられて得点化された。CFQ の得点が高いほど認知的失敗行動の出現頻度が高く、調査参加者は認知・記憶に関する失敗傾向や問題行動をより頻繁に確実に経験していると評価していることを示す。

ZTPI については、「全くあてはまらない」から「よくあてはまる」までの 5 段階の評定反応に対して、順に 1～5 の得点が与えられた。ZTPI ではいずれの項目においても評定値が高いほど、時間的展望に関連した特定の態度や認識の傾向が強いことを示す。

倫理的配慮

本研究は、筆者の所属する神戸学院大学の「ヒト

を対象とする研究等倫理委員会」に対して事前審査を申請し、2010 年 12 月に承認を受けた（承認番号 HEB101207-2）。研究調査に先立って、すべての参加者に対して、研究参加に関するさまざまな権利を保障する文書を示し、そうした理解のうえで本研究への参加協力に同意する文書を研究者（筆者）との間で取り交わした。そのなかで、(1) 実験等への参加は、個人の自由意思によるもので、参加しなくても不利益を受けないこと（授業科目の単位認定や成績評価とも関係しないこと）、(2) 実験等の開始後も、いつでも自由に中断・辞退でき、その場合も不利益を受けないこと、(3) 実験等の途中または終了後に本実験に関して疑問が生じたときは、すぐに連絡し、適切な対応・措置が受けられること、(4) 本研究によって得られたデータは統計処理を加えただけで学術雑誌などに公表されることがあるが、その場合も参加者の個人情報や厳格に保護され、個人を特定し得る情報は公表されないこと、が記載されていた。これらについて、研究者（筆者）と調査参加者の両者の署名入りの同一の同意書が 2 通作成され、双方が 1 通ずつ保管するという手続きがとられた。

結 果

認知的失敗質問紙（CFQ）の結果

表 1
認知的失敗質問紙（CFQ）の質問項目と評定値

番号	質問項目	平均	標準偏差
1	本などをよく考えないで読み過ぎてしまったために、もう一度読み直さなければならぬ	2.25	1.04
2	家の中を歩いてきて、何をするためにそこに来たのか思い出せない	2.11	1.03
3	道路に出ている看板や標識に気がつかない	1.80	1.12
4	方向を説明するとき、右と左を間違う	1.25	1.18
5	人にぶつかる	1.19	0.99
6	出かける時、明かりや火を消したか、鍵をかけたかどうか思い出せない	1.89	1.06
7	人と会った時、その人の名前を聞きのがす	2.17	1.05
8	失礼なことを言ったかもしれないと、後になって気付く	2.54	1.05
9	何かをしている時に話しかけられると聞きのがす	2.70	0.94
10	かんしゃくを起こして後悔する	1.57	1.11
11	大事な手紙に何日も返事を書かない	1.69	1.13
12	よく知っていてめったに通らない道に出るには、どこで曲がればいいのか思い出せない	1.66	1.20
13	スーパーマーケットに行くと、欲しい品物が目の前にあるのに見つけれない	1.46	1.09
14	正しい意味で言葉を使っているかどうか、急に気になる	2.15	1.01
15	決心するまであれこれ迷う	2.75	1.14
16	約束を忘れる	1.12	0.91
17	新聞や本をどこに置いたか思い出せない	1.93	1.03
18	例えば捨てようと思っていた包み紙を残して、チョコレートの方をうっかり捨てて	0.93	0.86
19	何かを聞いていなければならぬ時にぼんやり空想してしまう	2.71	0.89
20	人の名前を思い出せない	2.16	1.15
21	家の中で何かに取りかかっている時について他の事がしなくなってしまう	2.88	1.01
22	のどまで出かかっているのに、どうしても思い出せない	2.35	0.90
23	何かを買いにその店まで来たかが、思い出せない	1.20	1.02
24	物を落とす	1.61	1.12
25	言おうとしていたことを思い出せない	2.31	0.85
	全 体	1.94	1.17

注) 評定反応から評定値への数値変換(得点化)は以下のとおりである。

- 過去6か月の間で、まったくない=0
- 過去6か月の間で、めったにない=1
- 過去6か月の間で、ときどきある=2
- 過去6か月の間で、かなりよくある=3
- 過去6か月の間で、非常によくある=4

CFQの25項目のそれぞれに対する全調査参加者の評定値について、平均と標準偏差を算出した結果を表1に示す。質問項目の全体平均は1.94(標準偏差1.173)であった。したがって、この質問紙に記載されている、日常生活場面での特定の認知的失敗について、平均して、ほぼ「過去6カ月の間で、ときどきある」といった程度の頻度で経験されていることが示された。質問項目によって平均評定値は、かなりばらつきが見られるものの、平均評定値が3.00を超える項目はなかった。すなわち、質問項目のなかに、平均して「過去6カ月の間で、かなりよくある」または「過去6カ月の間で、非常によくある」といった頻繁に経験される行動記述文は含まれていなかった。

清水他(2006, 2007)の研究結果に基づいて、調査参加者ごとに各因子別の評定値の平均と標準偏差を算出し、図1に示す。試みに因子間の平均評定値を比べると、全体として因子の主効果の有意性が認められた [$F(4, 484) = 76.99, p < .001, \eta^2 = .389$]。因子間で平均評定値の差を見てみると、主として、平均評定値の高いのは、「うっかり、ぼんやりの失敗」と「検索失敗」で、次に「人名記憶の失敗」が高く、「空間的失敗」と「約束の失敗」がともに最も低かった[いずれも $ps < .05$]。したがって、本研究における調査参加者の全体的な認知的失敗の特徴として、CFQへの回答の結果から、不注意に基づく失敗や物忘れ、人名の想起失敗を予定・約束の失念や空間認知の失敗に比べて相対的に高い頻度で経験しているという自己評価をもっていることが示された。

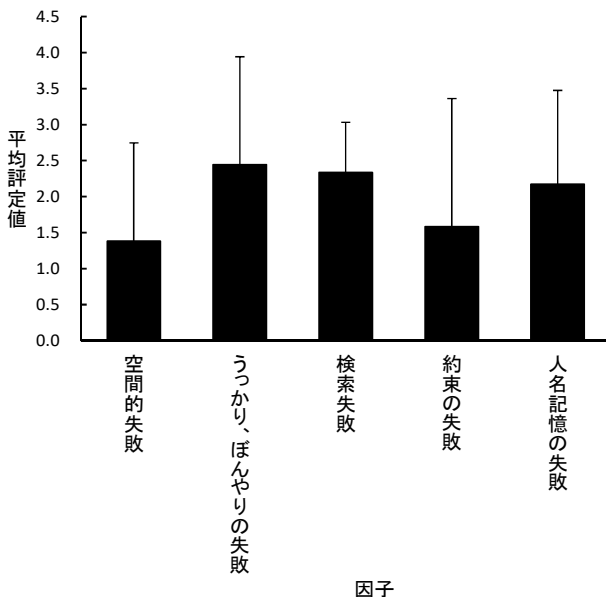


図1 認知的失敗質問紙 (CFQ) の因子別平均評定値 (エラーバーは1標準偏差を示す)

ジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の結果²

ZTPIの56項目のそれぞれに対する全調査参加者の評定値について、平均と標準偏差を算出した結果を表2に示す。質問項目の全体平均は3.30(標準偏差1.22)であった。下島他(2012)の研究結果に基づいて、調査参加者ごとに各因子別の評定値の平均と標準偏差を算出し、図2に示す。試みに因子間の平均評定値を比べると、全体として因子の主効果の有意性が認められた [$F(4, 484) = 35.34, p > .001, \eta^2 = .226$]。因子間で平均評定値の差を見てみると、主として、「過去否定」と「現在快樂」が他の因子に比べて高く、次いで「未来」と「過去肯定」が高く、「現在運命」が最も低かった[いずれも $ps > .05$]。したがって、本研究における調査参加者の全体的な時間的展望の特徴として、ZTPIへの回答の結果から、自己の一貫性に対して否定的に捉えたり、快樂的で向こう見ずな態度をとったりすることが相対的に多いことがうかがわれる。それらに比べて、将来の目標や見返りのために努力し、自己を肯定することがまれであるが、運命を受け入れるといった無力感を伴った態度に終始しているわけではないことが示された。

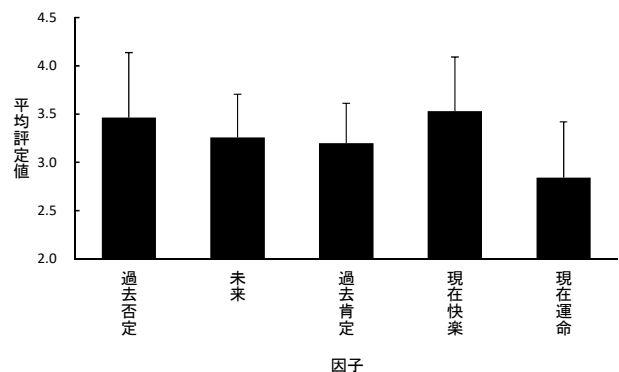


図2 ジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の因子別平均評定値 (エラーバーは1標準偏差を示す) (清水(2018)の図3を一部修正して再掲)

認知的失敗質問紙 (CFQ) とジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) における因子別項目評定値間の相関

CFQの5因子とZTPIの5因子における因子別平均評定値の間の相関係数を算出し、表3に示す。CFQとZTPIのそれぞれを構成する5因子の間で因子別平均評定値の相関関係をみていくと、次のようになる。すなわち、(a) ZTPIの「過去否定」は、CFQの「うっかり、ぼんやりの失敗」、「検索失敗」、

² 本研究のZTPIの結果については、すでに清水(2018)で発表している。

表 2
ジンバルドー時間的展望尺度 (ZTPI) の質問項目と評定値
(清水 (2018) の表 3 を一部修正して再掲)

番号	質問項目	平均	標準偏差
1	友達同士で集まって盛り上がるのは、人生の中で大切な楽しみのひとつだと思う	4.54	0.67
2	懐かしい光景、音、臭いによって、幼い頃のよい思い出がよみがえることがよくある	3.98	1.12
3	私の運命は運命によって定められるところが多い	2.57	1.07
4	人生の中で、ああすべきだったのに、と思うことが多い	3.96	1.15
5	私の決断は、周りの人や出来事によって大いに影響される	3.43	1.13
6	人は毎朝、その日の予定を計画するべきだと思う	2.73	1.19
7	昔のことを考えるのは楽しい	3.19	1.08
8	衝動的に行動することがある	3.98	0.93
9	時間通りに物事が進まなくても、心配はしない	2.89	1.17
10	何かをやり遂げようとするとき、目標を決めてそれに到達するための具体的な方法を考える	3.36	1.08
11	昔のことを思い出すと、悪い思い出よりも良い思い出の方が全体的に多い	2.95	1.28
12	大好きな音楽を聴いていると、時間を忘れることがよくある	3.93	1.19
13	夜遊びに行くことよりも、明日までにやるべき事や必要なことを終える方が大切だ	3.42	1.18
14	なるようにしかならないので、自分が何をしてもあまり関係ない	2.66	1.11
15	自分にとっての「古き良き時代」の話が好きである	3.13	1.15
16	過去のつらい経験が、繰り返し頭に浮かぶ	3.24	1.31
17	一日一日を精一杯生きようとしている	3.54	1.05
18	約束の時間に遅れるのは嫌いだ	3.93	1.15
19	毎日を人生最後の日だと思って過ごすのが理想である	2.61	1.42
20	楽しかった思い出が、すぐに心に浮かぶ	3.51	1.09
21	友人や上司・教師などに対する義務は遅れずに果たす	3.72	0.88
22	過去に虐待や拒絶をそれなりに経験した	2.27	1.30
23	その場のはずみで物事を決めてしまうことがある	3.79	1.05
24	2毎日を計画的にと言うよりは成り行きで過ごす	3.71	1.03
25	嫌な思い出が多いので、過去のことは思い出したくない	2.61	1.20
26	人生に刺激は重要だ	4.36	0.78
27	取り消してしまいたい間違いを過去に犯したことがある	3.66	1.25
28	時間内に終えることよりも、やっていることを楽しむことの方が大切だと思う	3.64	1.00
29	幼い頃が懐かしいと思う	3.95	1.01
30	決断する前に、メリットとデメリットを比べてみる	3.66	1.14
31	人生の進路は、自分ではどうしようもない力によって決められている	2.42	1.14
32	危険をおそれないからこそ、人生は退屈でなくなる	3.51	1.00
33	人生のゴールだけを考えるよりも、その道のりを楽しむことが大切だ	4.18	0.69
34	物事が期待通りにうまくいくことはめったにない	3.42	1.18
35	若い頃の嫌なイメージを忘れる事は難しい	3.68	1.05
36	目標、結果、成果について考えなければならないならば、自分の行動の過程や流れの中の楽しみが奪われてしまう	2.84	1.04
37	今を楽しんでいるときでも、つい過去のよく似た経験と比べてしまう	3.06	1.30
38	物事は変わるもので、将来の計画を立てるのは実際には不可能だ	2.93	1.02
39	どうしようもないことなので、将来について心配しても仕方がない	2.96	1.18
40	コツコツと取り組んで時間通りに課題を完了する	2.60	1.18
41	家族が昔はあであった、こうだった、と話し出しても耳を貸さない	2.81	1.21
42	人生の刺激を得るために冒険をする	3.31	1.20
43	やるべきことをリストにする	2.94	1.36
44	自分の頭ではなく気持ちに従う事が多い	3.53	1.15
45	やるべきことがあるとき、誘惑に耐えることができる	2.89	1.10
46	興奮して我を忘れることがある	2.88	1.27
47	複雑な現代の生活よりも、昔のシンプルな生活の方がいいと思う	3.07	1.08
48	わかりやすい人よりも思いつきで行動することの方が友人として好ましい	2.87	0.94
49	何度も繰り返される家族の行事や伝統が好きだ	3.54	1.13
50	過去に起きた嫌な出来事について考えることがある	3.67	1.16
51	前進するためならば、難しくてもおもしろくない課題に取り組むことができる	3.20	1.00
52	稼いだお金は、明日のために貯金するよりも今日の楽しみに使う	2.91	1.20
53	成功は努力よりも運で決まることが多い	2.89	1.04
54	人生の中でやりそこなった楽しいことについて考えることがある	3.50	1.21
55	親密な関係は情熱的な方がいい	3.51	1.09
56	仕事や課題の遅れを取り戻す時間は、後でいくらでもある	2.95	1.07
	全体	3.30	1.22

注) 評定反応から評定値への数値変換(得点化)は以下のとおりである。

- 全くあてはまらない=1
- あてはまらない=2
- どちらでもない=3
- あてはまる=4
- よくあてはまる=5

表3
認知的失敗質問紙 (CFQ) とジンバルドー時間的展望尺度
(ZTPI) の各因子別評定値間の相関

CFQの因子	ZTPIの因子				
	過去否定	未来	過去肯定	現在快樂	現在運命
空間的失敗	.162	-.227*	-.042	-.014	.182*
うっかり、ぼんやりの失敗	.506**	-.157	-.069	.147	.410**
検索失敗	.351**	-.135	.034	.198*	.328**
約束の失敗	.191*	-.205*	-.076	.162	.274**
人名記憶の失敗	.156	-.293**	-.165	-.122	.109

* $p < .05$ ** $p < .01$

「約束の失敗」との間にそれぞれ有意な正の相関が見られた。(b) ZTPI の「未来」は、CFQ の「空間的失敗」, 「約束の失敗」, 「人名記憶の失敗」との間にそれぞれ有意な負の相関が見られた。(c) ZTPI の「過去肯定」は CFQ のすべての因子と相関が見られなかった。(d) ZTPI の「現在快樂」は CFQ の「検索失敗」とのみ有意な正の相関が見られた。(e) ZTPI の「現在運命」は、CFQ の「空間的失敗」, 「うっかり、ぼんやりの失敗」, 「検索失敗」, 「約束の失敗」との間にそれぞれ有意な正の相関が見られた。

考 察

本研究は、大学生 122 名を対象に、認知的失敗に関するメタ記憶質問紙 (CFQ) と時間的展望に関する質問紙 (ZTPI) を用いた調査を実施し、回答データを収集した。それぞれの質問紙を構成する因子間の平均評定値の相関関係について整理・分析を行った。

分析の結果、日常生活場面における認知的失敗行動に関する自己評価と時間的展望との関係に関して、得られた主要な知見は次の 3 点にまとめることができる。

- (1) ZTPI の「過去否定」は CFQ の「うっかり、ぼんやりの失敗」, 「検索失敗」, 「約束の失敗」との間に有意な正の相関が見られた。これに対して、ZTPI の「過去肯定」は、CFQ のすべての因子と相関が見られなかった。
- (2) ZTPI の「現在快樂」は CFQ の「検索失敗」とのみ正の相関が見られたのに対して、ZTPI の「現在運命」は、CFQ の「空間的失敗」, 「うっかり、ぼんやりの失敗」, 「検索失敗」, 「約束の失敗」との間に正の相関が見られた。
- (3) ZTPI の「未来」は、CFQ の「空間的失敗」, 「約束の失敗」, 「人名記憶の失敗」との間に負の相関が見られた。

以上の 3 点について、順に考察を進めていく。

上記 (1) より、時間的展望に関連して、自己の一貫性や連続性における否定的な側面は、日常生活のさまざまな回想記憶や展望記憶に関連した失敗経験に基づいていることが示唆される。その一方で、自

己の一貫性・連続性における肯定的側面は日常場面での認知的失敗の自己評価とは結びついていないことが示唆される。清水 (2018) は、日常記憶質問紙 (Everyday Memory Questionnaire, EMQ) と成人メタ記憶尺度 (Metamemory in Adulthood questionnaire, MIA) という 2 種類のメタ記憶質問紙と ZTPI との関係を検討しているが、ZTPI の「過去否定」が一般的な物忘れや会話時での失念の多さとの間で相関が見られたのに対して、ZTPI の「過去肯定」はメタ記憶質問紙のいずれの因子とも相関が見られなかった。つまり、本研究の結果とほぼ一致した結果が得られている。

この結果に対して、たとえば、日常的に記憶に関する失敗や困難の経験が多いと認識している人ほど、記憶能力に自信がもてず、内的な記憶方略を用いて積極的に努力を傾けることがなく、時間的展望においても総じて過去を否定的・悲観的に捉えがちで、自らの努力の価値や成果を低く見積もっているといった解釈が可能である。これに対して、過去の自己を肯定的に捉える人は、日常生活場面でのさまざまな失敗行動の頻度や傾向とは結びつけていない。

こうした過去の自己における肯定的側面の認知と否定的側面の認知における非対称性は、記憶における気分一致効果などでも同様に観察される (e.g., 筒井, 1997)。気分一致効果とは、一般に、悲しいときに悲しかったことや辛かったことをよく思い出してよけいに悲しくなる、楽しいときに楽しいことを思い出してもつと楽しくなる、といった現象を指す。実験的に検討すると、気分一致効果はポジティブ気分では出現しやすいが、ネガティブ気分では必ずしも一貫した結果が得られないことが指摘されている。これは PNA (Positive-Negative Asymmetry) 現象と呼ばれている (e.g., 池上, 1992)。今回の調査結果は、気分一致効果とは直接には関連しないものの、時間的展望に関連した自己のポジティブな側面とネガティブな側面に関する認識が過去の認知的失敗経験や現在の認知的失敗傾向の自己評価と非対称的に結びついているという点で興味深い。おそらく、いわゆる自伝的記憶の指示機能の一環として、個人にとってネガティブな出来事の記憶をより確実に保持することが将来にとって有用であるのかもしれない

(Bluck, 2003; 佐藤, 2008)。

上記 (2) より、快樂的で危険を好み、向こう見ずな態度をとる傾向と日常場面での出来事の検索困難の傾向とは関係しているようである。検索失敗の経験が多いという自己評価をもつ人ほど、現実的な快樂を求める傾向にあるという結果が得られた。おそらく「現在快樂」の傾向の強い人が目の新たな課題に取り組んでいく際に、過去の物忘れに関連した検索失敗の経験が実際には多いことを認めつつも、それらに固執しては前に進めないといった現実的・樂觀的な意思決定が働くのかもしれない。

それとは対照的に、人生は運命で決まっているといった無力感は、人名が適切に想起できないといった自己評価とは関係しておらず、それ以外の回想記憶や展望記憶に関連したすべての記憶困難と関係していることが示唆される。

上記 (3) より、自己の将来の目標や見返りのために努力する態度は、空間的な認知行動の失敗経験が相対的に少なく、展望記憶や人名記憶の困難がまれであることと関係しているようである。しかしながら、そうした態度は、CFQ の「うっかり、ぼんやりの失敗」や「検索失敗」とは相関が見られなかった。このことは、本研究の調査参加者が大学生であることを考慮すると、貴重な示唆を含んでいると考えられる。時間的展望研究の視点から大学生の社会人基礎力を検討した奥田 (2014) によれば、大学生は日常生活のさまざまな側面が数値化され、測定され、可視化されている。そのため、時間的展望を抱くうえで、いわば、捉えやすい知的能力の高さや失敗経験の少なさを基礎に置いている可能性が高い。どちらかと言えば、不注意による物忘れや特定の名称が想起できない回想記憶の困難よりも展望記憶や人名記憶の想起困難のほうが明確に自覚されやすいのかもしれない。そうすると、人名の検索失敗をはじめ、約束事や予定の失念などは、記憶の自己効力感に大きく影響していることが考えられる。その点について、冒頭で述べたセルフハンディキャッピングや自己充足的予言に関する個人差と記憶能力の自己評価との関係については、今後の研究課題として検討すべきであろう。

引用文献

安藤 清志 (1990). 「自己の姿の表出」の段階 中村 陽吉 (編) 「自己過程」の社会心理学 (pp. 143-198) 東京大学出版会

Bluck, S. (2003). Autobiographical memory: Exploring its functions in everyday life. *Memory, 11*, 113-123.

Boniwell, I., Osin, E., Linley, P. A., & Ivanchenko, G. V. (2010). A question of balance: Time perspective and well-being in British and Russian samples. *Journal of Positive Psychology, 5*, 24-40.

Boniwell, I., & Zimbardo, P. G. (2004). Balancing time perspective in pursuit of optimal functioning. In P. A. Linley & S. Joseph (Eds.), *Positive psychology in practice* (pp. 165-178), Hoboken, NJ: Wiley.

Broadbent, D. E., Cooper, P. F., FitzGerald, P., & Parkes, K. R. (1982). The Cognitive Failures Questionnaire (CFQ) and its correlates. *British Journal of Clinical Psychology, 21*, 1-16.

Drake, L., Duncan, E., Sutherland, F., Abernethy, C., & Henry, C. (2008). Time perspective and correlates of wellbeing. *Time & Society, 17*, 47-61.

芳賀 繁 (2004). 失敗の心理学 日本経済新聞社

池上 知子 (1992). 社会的認知の情報処理 多鹿秀継・川口 潤・池上 知子・山 祐嗣 情報処理の心理学 - 認知心理学入門 - (pp.106-156) サイエンス社

井上 毅 (2002). ヒューマンエラーとアクションスリップ 井上 毅・佐藤 浩一 (編著) 日常認知の心理学 (pp.36-50) 北大路書房

Jones, E. E., & Berglas, S. (1978). Control of attributions about the self through self-handicapping strategies: The appeal of alcohol and the role of underachievement. *Personality and Social Psychology Bulletin, 4*, 200-206.

海保 博之 (1999). 人はなぜ誤るのか 福村出版

楠見 孝・高橋 秀明 (1992). メタ記憶 安西 祐一郎・石崎 俊・大津 由紀雄・波多野 誼余夫・溝口 文雄 (編) 認知科学ハンドブック (pp.238-250) 共立出版

Lewin, K. (1948). *Resolving social conflicts: Selected papers on group dynamics*. New York: Harper and Brpthers. (末永 俊郎 (訳) (1954). 社会的葛藤の解決 - グループダイナミックス論文集 - 東京創元社)

Lewin, K. (1951). *Field theory in social science: Selected theoretical papers*. New York: Harper and Brothers. (猪股 佐登留 (訳) (1979). 社会科学における場の理論 誠信書房)

Merton, R. K. (1957). *Social theory and social structure*. New York: Free Press. (森 東吾・森 好夫・金沢 実・中島 竜太郎 (訳) (1961). 社会理論と社会構造 みすず書房)

Nelson, T. O., & Narens, L. (1990). Metamemory: A theoretical framework and new findings. In G. H. Bower (Ed.), *The psychology of learning and motivation*, Vol. 26 (pp.125-173). New York: Academic Press.

奥田 雄一郎 (2014). 大学生の時間的展望と社会人基礎力 - 時間的展望のタイプによる検討 共愛学園前橋国際大学論集, 14, 33-46.

Reason, J. (1984). Absentmindedness and cognitive control. In J. E. Harris & E. Morris (Eds.), *Everyday*

- memory, actions and absentmindedness* (pp.113-132). London: Academic Press.
- Reason, J. (1990). *Human error*. New York: Cambridge University.
- 佐藤 浩一 (2008). 自伝的記憶の機能 佐藤 浩一・越智 啓太・下島 裕美 (編) 自伝的記憶の心理学 (pp. 60-75) 北大路書房.
- 清水 寛之 (2012). 記憶 箱田 裕司 (編) 心理学研究法2 認知 (pp.47-96) 誠信書房.
- 清水 寛之 (2013). メタ記憶 日本認知心理学会 (編) 認知心理学ハンドブック (pp.154-155) 有斐閣.
- 清水 寛之 (2018). 日常場面におけるメタ記憶と時間的展望－日常記憶質問紙 (EMQ), 成人メタ記憶尺度 (MIA), および時間的展望尺度 (ZTPI) による分析－ 人文学部紀要 (神戸学院大学人文学部), 38, 103-120.
- 清水 寛之・高橋 雅延・齊藤 智 (2006). 日常記憶に関する自己評価の分析－メタ記憶質問紙による検討－ 心理学研究, 77, 366-371.
- 清水 寛之・高橋 雅延・齊藤 智 (2007). メタ記憶質問紙を用いた日常記憶に関する自己評価－日常記憶質問紙, 認知的失敗質問紙, 及び記憶能力質問紙の標準データと因子構造－ 人文学部紀要 (神戸学院大学人文学部), 27, 143-166.
- 白井 利明 (1997). 時間的展望の生涯発達心理学 勁草書房
- 下島 裕美・佐藤 浩一・越智 啓太 (2012). 日本版 Zimbardo Time Perspective Inventory (ZTPI) の因子構造の検討 パーソナリティ研究, 21, 74-83.
- 筒井 美加 (1997). 自己関連語における気分一致効果 心理学研究, 68, 25-32.
- Wallace, J. C., Kass, S. J., & Stanny, C. J. (2002). The Cognitive Failures Questionnaire revisited: Dimensions and correlates. *Journal of General Psychology*, 129, 238-256.
- 山田 尚子 (1999). 失敗傾向質問紙の作成及び信頼性・妥当性の検討 教育心理学研究, 47, 501-510.
- Zimbardo, P. G., & Boyd, J. N. (1999). Putting time in perspective: A valid, reliable individual-differences metric. *Journal of Personality and Social Psychology*, 77, 1271-1288.

—2018.10.10 受稿, 2018.11.20 受理—